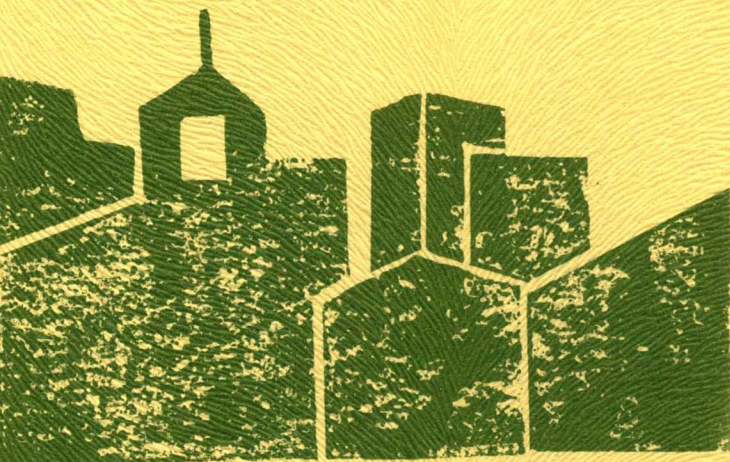


畑山 博

オーロラの街へ

毎日新聞社



畑山 博

オーロラの街へ



オーロラの街へ

昭和五十二年一月十日 印刷
昭和五十二年一月二十日 発行

著者 畑山博 はた やま ひろし

編集人 桑原隆次郎
発行人 伊奈一男

発行所 毎日新聞社

〒100 東京都千代田区一ツ橋
〒550 大阪市北区堂島上
〒603 北九州市小倉北区紺屋町
〒450 名古屋市中村区堀内町

印刷所 図書印刷

製本所 佐久間製本

オーロラの街へ 目次

第一章	溶け落ちる眼	5
第二章	死亡者レース	57
第三章	心から心へ	105
第四章	オーロラの街へ	161
	あとがき	227

装
幀
松
井
孝
夫

オーロラの街へ

第一章

溶け落ちる眼

その日、いつものように、プライムチキンフレバード、ビーフデイナーなど五十個のドッグフードを保温函へ並べた須郡宏は、車の荷台の扉を閉じようとして、指先をはさんでしまった。

いつも扉の金具がうまく合わないのは、観音開きのジュラルミンの扉自体が大きく歪んでいるからなのだけれど、会社にはもうまるで修理の意志などありはしない。

すでに二度もその部分の修理だけのために工場へ出したのだけれど、直ったように見えるのはほんの二、三日の間だけ。すぐまた元のもくあみになってしまう。そんな車にはもう金をかけられないと言うのである。

たぶん、このジュラルミンの扉自体がもっているどうしようもない性癖なのだと思ふ。思いながら、ついまだそれを飼い馴しきれずに、指の筋や爪を痛めてしまう。

はさんだ指をあわてて唇の間に差しこんでなめる。右肩を一方の扉に押しつけ、左手で片方の扉を引き、身体をひねるようにして動かしながら、もう一度閉める。扉はようやく最後の金具のこすれる音がして閉まった。

止め金の角を強く押したせいだろうか。拇指と人差指の先にへこみが出来ている。もう一度その指をなめ、ズボンのわきでこする。以前から何度もやって癖になってしまっている。配達に出ても停まるたびにやるので、いつの間にかはき替え用の二つの作業ズボンとも、そのころがかびでも生えたように変色してしまっている。

運転台に上る前に、須郡宏は、ふと腕時計を覗いた。三時七分。

「遅れたな。少し」

いったんポケットのたばこを掴みかけた手を引っこめて、またズボンのわきをこする。支配人の越生は、こうした出発時刻の二、三分の遅れとか、回収した食器の員数が合わないとか、そんな下らないことがただにびくびくしているような男だった。

「なんや。須郡さん、まだ出んかったんかいな。子どもの山車とちゃうのやで」

あんのじょうだ。いつものダブルのスーツを着こんだ小柄な身体を揺すりながら、いきなり配送室の戸口から出てきて言った。

「ナスタール様、ベベ様、ボボ様、サノヨイヨイ様、ずずいずいと右や左のお犬様。あんな、お客をそまつにしたらあかんでえ」

支配人は言った。無言で彼はふり返り、大きくうなずき返してみせた。出発が遅れたのは、ビーフアンドエッグの調理が遅れたからですよとも言い返せば、かえって相手を不機嫌にさせることになる。一つ憶えみたいな冗談を、十日も叫ばなくなってしまう。

ゆっくりと運転台に腰を下ろし、ダッシュボードに飾ってあるスカッチヌガーの化粧箱を置き直した。客からもらったその菓子空箱がかわいらしいからと言って、澄枝が飾れるように細工をした。リボンの間に細いひもを通して、フロントガラスの上にとめただけなのだが、配達先の女たちが何人もほめるマスコットだった。

倒れても傾いてもいなかったけれど、そのマスコットを直し、須郡宏はアクセルをふかした。

「おい。須郡ちゃんよ。閣下、閣下」

まただ。開け放たれた口から、こんどは支配人の甥のKが叫ぶ。

「西十丁目の大学の先生のところ、急いでキャット用一食追加。ゲストじゃない。今夜からずうっとだ」

緑色の平たい弁当箱を片手で突き出すようにしながらKは、運転台の下までやってきた。

改装車のエンジンは、保温函の扉にも増してひねくれた癖があつて、曲りながらギヤを入れ換えようとするたびに、しゃがれた呻き声をあげる。しゃがれた呻き声をあげて、手負いの猪みたいつんのめる。

須郡宏の配達区域は、大通り公園と一丁目大通りをはさんで、市の西南側四分の一の区域である。朝八時に出勤し、すぐ前日配達した食器の回収にまわり、まわりながら朝の配達をかねる。一日二回、定時コースをまわるだけで九時間たってしまう。

店を出てそのまま走りつづけると山麓の公園に出る道をしばらく走り、ビル街から住宅街に入る。アスファルトの道路が波状のきざみをつけたコンクリートの路面に変わり、急な登り坂にさしかかると、やがて両側に葉の落ちたプラタナス並木のつづく高級住宅街になる。

タイヤが路面にこすれる音がリズムカルに変る。真昼間から大きな門灯をつけておく癖のあるF家の石門がゆっくりと近づいてくる。以前の配達係から引きついだときからの変わらない定時配達コースの最初の家である。

ブザーを押すと、いつもの初老のお手伝いさんが出てきて、無言で身体をよけて通れと合図をする。玄関わきの木戸をくぐって犬舎へ行き、弁当を換えてくるまでそこで待つのである。

まるで朝夕のその二回きりしか通りを眺めることを許されてでもないように執拗な眠つき

で、きょうもまた外を眺めはじめたお手伝いさんを残して、彼は中に入った。

美香保のトリミングを受けている雌のスタンダードプードル。立ち上がると腰の高さよりもっと背丈があった。首と腰に、芝生のパンツでもはいたような刈りこみをされ、脚にも腕輪形に飾り毛が残されている。そのプードルは、彼がすぐそばまで近づいて弁当箱のふたを開けはじめても、ただじっと四つ足踏んばって見つめているだけだ。

黄身だけの卵とビーフのひき肉を使ったビーフアンドエッグは、野菜も入って甘あたたかい茶碗むしのような色をしている。嗅ぎなれたその臭いを鼻孔いっぱいに浴びながら犬舎のわきに置いてやる時も、プードルは、足を踏んばったまま身動きしない。そのくせ、今朝方の弁当箱は、ひき肉の粒の一かけらも残していない空っぽなのだ。

ピオチンよけ、プトマイン中毒よけ。おまけに雨天の日は平時の一〇パーセント減量までして注意して作られる配達弁当も、飽食した犬どもには、もはや尾をふる興味さえ引き起こさないらしい。コースの中ほどにあるダックスフンドの雌の老犬などは、とがった鼻で食器の中をかきまわし、いつだって肉以外のものはぜんぶ器の外へはじき出してしまふ。

スタンダードプードルの朝食の器を引き取り外に出ると、さっきまではなかった乾いた風が坂下の方から吹いていた。

風にのって、ぐおんおんという人や器物や車や犬たちのぶつかり合う音が聞えてくる。それは互いに悪意でももち合っているもののようにきしみながら近づいてくる感じなのだけれど、少しも大きな音にならない。

須郡宏は、運転台のドアを開け、後の保温函の扉を開け、中のディナーを片っ端から助手席へ移しはじめた。五十個ぜんぶ保温函に収めるなど、店を発車するときだけでたくさんだ。須郡宏は、また右肩で一方を押しながら扉を閉めた。

道幅は同じだが街路樹の代りに街灯のつづく道に入り、道はさらに公園の方に向かい、急に大きく左へ折れて山の手の住宅街を走りつづける。

初めて犬の離乳食を運ぶ家で、その家の子どもたちに入れもののチューブを珍しがられて少し時間オーバーしたが、すべてはいつものままだった。どう考えても、緊張よりも弛緩が支配している街のたたずまいであった。離乳食の家から数軒目に、魚肉グラタンのキャットフードを配り、また下町へ戻り、中島公園で一休みし、ふたたび教会前から山の手に向かう。

ある犬は、食器の中へ鼻先をつっこむ前に身体を一回転させ、敷きわらの上でしきりに下腹部をこする。肉を噛むとき、首を振るたびに長い飾り毛がかすかな音をたててなびき、欠けている小臼歯の間を唾が流れる。ある家では、セーブルホワイトのコリーが交配の姿勢をとらせられる

たびに放尿して、若い女のサービスを困らせていた。

ロープウェイ駅まで到着しないうちに、周囲は暗くなりはじめた。砂ぼこりをかぶった街路樹の枯葉が、ところどころ糊づけされたように重なり合ったまま落ちないでいるのは、あれはどんな病気なのだろうか。引越し荷物を積んだ小型トラックが、荷縄の端を舗道にひきずりながら走って行った。街は、その夜も、過ぎてゆく時間のひだひだに何か小さい棘のようなものを隠して息をはずませていた。

そんな夜は、澄枝と盛り場のどこかで、ナリブカかビールを飲んでうまい食事をして、それから帰るにかぎるのだった。例えばあの駅前ビルの展望食堂の澄枝の好きな窓ぎわ。八人掛けの丸テーブルを二人だけで占領して、ゆっくりとみぞれのきそうな街を眺めて、そうして帰るにかぎるのだった。

美香保の彼女の勤め先へ電話をすると、澄枝は、ちょうど今仮縫いが一つ終って、今夜は時間通りに帰れるのよと、少し寒そうな声で言った。

昼中乗りまわしていた配達車に乗って、美香保へ妻を迎えにゆく。いったん大通公園ぎわの店の前に車を置きに戻り、二人で食事をして、ビール一杯分ほどの酔いをさました。がまた車のところへ戻ってくる。ときには車に乗って帰らずに、そのままバスか列車で家まで帰る。その夜も、そんな何の変哲もない一日であるはずだった。

展望食堂を出て、車を置いてある店の方はかなり歩き出してしまってから、みぞれが降り出した。

白色のボディに濃緑色の文字で店の名を書かれた配達用のライトバンは、右前輪のタイヤの空気がやや少なく、カーブのたびにハンドルに軽い振動をよこした。

豊平三条通りをいつものように東へ向かって走っていた。みぞれはしだいに強くなりはじめて